

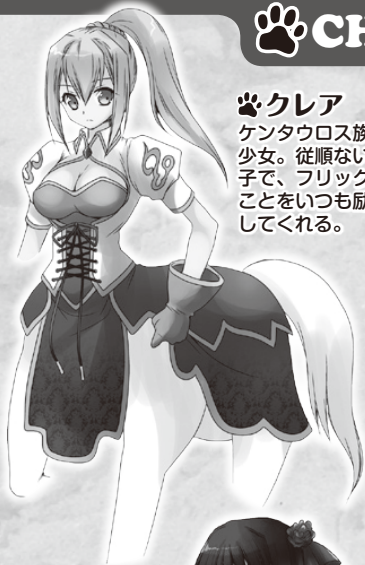
モンスター娘が恋人に なりたそうにこちらを見ている!

上田ながの
挿絵／黒澤清崇

立ち読み版



CHARACTERS



クレア

ケンタウロス族の少女。従順ないい子で、フリックのことをいつも励ましてくれる。



フリック＝ リファリス

魔法学校に通う学生。かつて世界を救った大魔法使いの子孫だが、魔法を使うことができない。

ミア

ラミア族の少女。普段は無口だが、たまに喋る際の声はとても美しい。





🐾ハル

ハービー族の少女。人間に対する憎悪に取りつかれ、人里を襲う。

🐾ライム

スライム族の少女。魔法が使えないフリックのことを小馬鹿にしている。



🐾リルカ

ティファニアの使い魔。数千年の時を生きているフェンリル族。

🐾ティファニア
魔法学校の教師。落ちこぼれのフリックに対しても優しく接するお姉さん。



語りながらフリフリと尻を左右に振ってくる。普段のクレアからはまるで想像できないほどに、浅ましい姿だった。

「いいんだね？」

フリックだつて年頃の童貞少年である。こんな姿を見せつけられて我慢なんてできるはずがなかった。

「はい……。お、お願いです。私と……。私とこ、交尾して下さい……」

交尾——露骨な言葉にビクンツとペニス跳ねる。

「そ、それじゃあ、いくね」

「き、来て下さい」

こちらの腰の位置に合わせるように、クレアは腰を落としてきた。クパツと口を開く膣口に、フリックは肉先を添える。

グチュツ。

「あ、あんっ」

ほんの少し触れただけで、すぐさまヒダヒダの一枚一枚が亀頭に絡みついてきた。ペニスが火傷してしまうのではないかと思えるほどに、花弁は熱く火照っている。

（する。これから——クレアとセックス……。交尾をするんだ！）

密着させているだけで射精してしまいそうなほどの興奮を覚えながら、フリックは腰を

突き出し、口を開いた肉穴にペニスを挿し込んだ。

ずじゅつ、ぐじゅるうう……。

「ふっひ！ あっ、き、来た。は、挿入はいって。んっんっんっ、挿入はいってきましたあ」

愛液に塗れた膣中に、肉棒が沈み込んでいく。ケンタウロスの膣道ちんちんを、熱い猛りまがりで内側から拡張かくちやうしていった。

「これ、わ、私の……私の膣中ちんちんがふ、フリックフリックさんので——あっあっ、広げられてくみ、みたいですよ。膣中に、膣中に熱いのが広がる」

熱い吐息を漏らしながら、切なげに眉根を寄せる。ビクンッビクンッと馬を思わせる尻が、痙攣けいれんするように跳ねた。

「い、いいよ。すごく気持ちいい。クレアの膣中——温かくて、溶けちゃいそうだ」

膣壁が肉槍に絡みつく。想像さうぞうしていたよりもずつと、蜜壺みつろうの締めつけはきついものだった。襲襲の一枚一枚が肉茎をぎつちりと啜すすえ込み、カリ首かりくびを妖しく撫なでで上げてくる。この感覚かんがくだけで、いつ白濁液はくじやくを撃ち放はなつてしまってもおかしくないほどに気持ちいい。

（でも駄目だ。まだ射精だ精せいせない。まだ我慢だ！）

クレアの全部をまだ自分のものにしていない。それに、彼女にも感じてもらいたかった。だから必死ひっしに射精感せいしんかんを抑え込み、より奥まで肉槍にくやりを挿し込んでいく。

ぶちっぶちぶちぶちいっ！

「くっひ、ひっひっひあああああっ！」

瞬間——肉先が何かを突き破るような音が聞こえた気がした。結合部からツツツと赤い血が一筋垂れ流れる。

「こ、これって……だ、大丈夫？　痛くない？」

間違はなく破瓜の血だ。ケンタウロスにも処女膜はあったらしい。

「だ……はあはあ……大丈夫です。い、痛みよりも……あっあっ、ず、ずっと、き、気持ちよさの方がま、勝ってます……」

けれど痛みはほとんど感じていないようだった。その辺りは多少人間とは違うのかも知れない。

「なら——もつと、もつと奥まで挿入れるね！」

クレアの身体の奥の奥まで、自分のものにしたかった。想いのままに腰を突き出し、膣奥を肉先で叩く。

「あっ——あっひ、ひあっ」

ズンツと肉槍を突き込んだ瞬間、ケンタウロス少女は瞳を見開いた。ドブジュツと結合部からは愛液が溢れ出す。

「あっ、こつれ、んんん。す、すごつい、お、奥——わ、わたっしの、お、おつくまで、は、挿入って……挿入ってます」

はふうううつと心地よさそうに熱い吐息をクレアは漏らす。

「どう？ い、痛くない？」

「は、はひ……だ、大丈夫です。ふ、フリックさんは……あつあつ、だ、大丈夫で、ですか？ 私のな、腔中——き、気持ちいいですか？」

振り返ってこちらを見つめながら、少しばかり不安そうに尋ねてくる。

「大丈夫。気持ちいいよ。すごく——すごくいい。クレアの腔中、最高だよ」

本心からの言葉だった。

実際腔中はペニスが押し潰されてしまうのではないかと思うくらいに締めつけがきつかった。挿入しているだけで下半身がドロドロに溶けてしまうのではないかと錯覚するほどに心地いい。

「よかった。う、嬉しいです。んっく、私も気持ちいい。硬くて、大きいフリックさんのを腔中に感じてただけで、す、すごくいいです。だ、だから、わ、私のことは気にせず、フリックさんのお、思う通りに動いて下さい」

「分かったよ。それじゃあいくね。クレアも……クレアも気持ちよくなつてね！」

正直言うとう、もう本能を抑えられそうになかった。だから愛しい少女の言葉に遠慮なく甘え、手を伸ばして彼女の両手を背後から掴むと、情欲の赴くままにピストン運動を開始する。

ぐじゅつ、ずつじゅつ、ずぶじゅうつ！ ずじゅつずじゅつずじゅつずじゅつ！

「ふっひ！ あっあつ、う、うごつ、動いています。わ、私の——わたっしの膣中で、ペニス……んっんふう……ふ、フリックさんのペニスが動いているのが分かります」

腰を動かし始めた途端、はふあああつとクレアは表情を緩めた。けれど、それとは逆に蜜壺の締めつけはよりきつくなる。増幅する愉悦。膨れあがる性感の赴くままに、フリックは膣奥に何度もペニスを叩きつけた。

「好きだ！ クレア——大好きだ！」

溢れ出す愛おしさを口に出しながら、肉棒で蜜壺を蹂躪する。どじゅつどじゅつと馬の尻に腰を打ちつけるたび、ぷるぷると肉が震えた。

「私も——わたっしも、ふあつ、あつあつあつふ……。だ、だい、大好きです。あ、愛しています。んっく、あつ、ふっく、んはぁ……。ふ、フリックさんのこと愛しています」

クレアも素直に気持ちの口に出してくれる。それが嬉しい。彼女に好きだ、愛してると言われるたびに、胸の中に温かなものが広がっていくのを感じた。

この心地よさをクレアにも味わって欲しい。もっともっと感じて欲しい——愛おしさに突き動かされるように、一突きごとにピストン速度を上げていく。

本当に獣になったかのような激しい交尾。

どじゅぼつどじゅぼつどじゅぼつどじゅぼつ！

「す、すごっぴ、こつれ、すつご、おつく、奥を叩いてます。あつあつあつ、わ、わたっしの、なつか深いところまで、ペ、ペニスが、ペニスが届いてます！ いったい、こつれ、気持ち、気持ちいい♥ すごくいい♥」

肉穴を抉るようにペニスを撃ち込む。肉先で膣奥を叩くたびに、ブルンブルンッと剥き出しになった巨乳が揺れた。ピストンに合わせてポニーテールが揺れ動く。汗が飛び散る様が扇情的で、より興奮が煽り立てられた。ビュッビュッビュッと結合部からは肉棒を突き込まれる圧力で愛液が吹き出す。下腹部を濡らす牝蜜の温かさに、自然とペニスが大きさを増していった。

「お、大きくなってる。わ、私の膣中で——大きくなってます。んふっ、あふあつ、あつふううう……。き、気持ちいいですか？ あつく、んっんっんっ、ふ、フリックさんも感じつつ、くれてますか？ わ、私の身体、き、気持ちいいですか？」

「うん。感じてる。僕も、クレアの身体で感じてるよ！」

一突きごとに蜜壺は締めつけを増す。子種を搾り取るかのように絡みついてくる肉壁の感触は、まるで柔らかかなゼリーの中にペニスを突き込んでいるのではないかと錯覚するくらいに気持ちよかった。

感じないはずがない。

「分かるだろ？ 僕のが大きくなってるのが……。感じてる証拠だよ」

「はい。わ、分かります。すごく、なつかで、わたっしの膣中で、大きくなってる。あつあつ、駄目、こつれ、我慢できない。おかしくなる。私、おかしくなります」

「いいよ。おかしくなっていない。見せて、おかしくなったクレアを見せて！」

手綱たづなを引くように手を引つ張りながら、より奥まで肉棒を突き込み、突き込み、突き込み、突き込み、突き込む！

「だつめ、あつ、ほんつとに、わたっし、私——あつあつあああつ」

突き込みに合わせて漏れ出す嬌声が甲高くなっていた。

どじゅんっ——と子宮口を肉先で叩く。

「ふっひ！ ふひいいい！」

ギユウウツと蜜壺がこれまで以上に収縮した。

「うあつ、こつれ、す、すごいっ！ うあつ、すごいよお」

それこそ腰を振ることもできないほどの締めつけである。ピストンが止まった。

瞬間——、

「もう、我慢できないっ！」

これまでペニスの位置に合わせて下げられていたクレアの腰が上がった。

「わっ、うわわわわっ！」

挿んだ腕とがっちり啜え込まれたペニスによって支えられたフリックの身体が、地面か

ら浮き上がる。そのままの状態で――、

「くっひ、あっあっあああああああ！」

「おわああっ」

嬌声を上げながら唐突にクレアは四本の脚で大地を蹴り、走り始めた。

じゅばごっじゅばごっじゅばごっじゅばごっ！

激しい動きにより、フリックの身体が上下に揺れる。それでもきつい締めつけのお陰でペニスが抜けるようなことはなかった。それどころか、走りの振動が新たな性感となって肉棒を包み込む。

「ふっく、あっあっ、まった、また大きくなってきました。あっあっあっ、わったし、私の膣中で大きくっ！ あっあっ、いい、こつれ、これいい♥ 気持ちよすぎるっ♥ 止まらない。わったし、止まれせん♥」

膨れあがる肉棒によって更なる肉悦を覚えているのか、漏れ出す喘ぎ声がより大きなものになっていく。同時に走る速度も上がっていった。

「くっ、き、気持ちいい。いいよ。すごくいいよクレアあっ！」

唐突に走りだされたことには驚いたけれど、驚愕している暇などないくらいに性感を覚えてしまう。クレアの脚が地面を蹴るたびに、肉棒はより膨張していく。下腹部からは射精衝動が爆発しそうなほどに膨れあがってきた。最早抑えきれそうにない。

「で、射精するっ！　こ、これ、射精ちやう。射精ちやうよ」

膨れあがった肉茎がビクビクと震えた。

「分かります。わ、私の膣中で——ふ、フリックさんのつが、震えています。だ、射精して。射精して下さい！　あっあっあっ、私の、私の膣中に射精してっ！」

切なげな表情でポニーテールを揺らし、乳房を弾ませながら走りつつ、射精を求めてくる。その言葉を証明するかのように、膣壁がより収縮した。

我慢などできない。

「だ、射精すよっ！　クレアの、クレアのなっかに、だ、射精すよお」

ドクンツと肉茎が震える。破裂しそうなほどに膨れあがった亀頭の先端部が口を開く。

「くっ、うああああっ！」

性感が爆破した。

どびゅっ！　びゅっびゅっびゅっびゅっびゅばあああっ！

我慢に我慢を重ねた排尿時にも似た解放感を覚える。痙攣する猛りが多量の熱汁を撃ち放った。ビュッビュッビュッと膣中に、濃厚牡汁を容赦なく流し込む。

「ひあああっ！　き、きたっ♥　熱いのが、熱いのが私のなっか、膣中にき、きた」

瞬間——。　「あっ、んっ——ふんんんんん！　あっあっ、熱い。膣中が、私の膣中が熱いので満たさ



れていきます。あつあつあつ、こつれ、私——わたっし、い、絶頂いつく♥ 気持ちいい♥
わたっし、き、気持ちよすぎて絶頂く！ 絶頂きます♥

走りながらビクンッと肉体を震わせ、眉毛を八の字に曲げながら、クレアも達した。

ニジュウウツと膈壁が痙攣しながら、ドクツドクツと白濁液を撃ち放つ肉棒を最後の一滴まで子種を搾り取るうとするかのように締めつけてくる。

「くつ、ま、まだ射精るっ！ うっ、うううう」

この刺激により、更なる射精が促された。

どびゆるっ！ びゅぶっ、びゅぶるるるうっ！

「ま、まだ、まだくるっ！ あつあつ、熱いのが、まだ、まだ射精てますっ！ すごい、こんな、こんなに射精されたら、わたっし、い、絶頂いって、絶頂いてるのに、い、絶頂いきます。絶頂いきながら、気持ちよくなっちゃいますう♥ ひっっひっっひっああああ♥」

性感の上に性感が重なる。再びクレアは快楽の頂に達した。今度は足を止め、うっとり
と瞳を細めながら性感に溺れる。

「あつ、ふあつ……ふああああ……」

ビクンツビクンツと肢体が震えた。結合部からは流し込まれた白濁液が愛液と混ざりながら溢れ出す。

「ああ、フリックさん……好き……。だ、大好きで……す……♥」

疑問に答えるようにスライムの肉体に変化が起こる。ゼリー状の身体が、ペニスに絡みついてきた。ねっとりとした感触。膣中に挿入しているかのような感覚。

それがゆつくりとペニスを抜くようにうねってくる。数度擦られるだけで、腰が抜けそうになるほどの性感を覚えた。当然肉棒はすぐにムクムクと勃起し始めてしまう。

「……お、大きくなってきたわね。まま、まあ……大きくなったところで、たた、たいしたことはないけど」

などと余裕ぶってみせつつも、僅かに身体を赤く染める。明らかにライムは勃起ペニスを見て動揺していた。

が、彼女の動揺に気付く余裕はない。

「くっふ、こ、これ……どど、どういうつもりだよ？　こんなこと……くっ、いけないよや、やめるべきだ！」

にちやっにちやっにちやああ……。

肉棒を擦り上げられるたび、ビクビクビクツと屹立は激しく反応してしまう。ペニスが蕩けてしまいそうなほどの快楽。一扱きごとに明らかに肉槍は大きさを増してしまっていた。

「どういうつもりって……だから言ったじゃない。あんたを試してやるって」

「ただ、だから試すって何を……」

「もちろん、あんたが本当にあの二人以外に手を出さないかをよ。本当にあんたがああ二

人を愛してるなら、これくらい耐えられるでしょ？ いい、射精なんかしたら……あ、あんなのちんぽを溶かしてやるんだからね！」

「と、溶かすって……」

足場の不安定な高い所に立った時のような、股間がヒュンツとする感覚が走る。ペニスを溶かされる——これほど恐ろしいことはない。

「……冗談だよな？」

「あたしは冗談なんか言わないわよ！ い、いくわよ!!」
にじゅっ……ぐじゅるうう……。

「くっはっ、うあああああ」

途端にペニスへの締めつけが更に激しいものに変わった。ただ擦り上げてくるだけでは。ゼリー状の体内にはヒダヒダのようなもので作り出され、それら一枚一枚がペニスに絡みつき、精液を絞り出すように締め上げてくる。

伝わってくる性感は実際にセックスしているのと何ら遜色がなかった。すぐさま尿道を焦がすような射精衝動がわき上がってくる。

（こ、これすごい。気持ちよすぎる。こんなのが、我慢できない——でも、でも耐えないと……我慢しないとっ！）

射精するわけにはいかない。もしこのまま射精してしまえば、スライムによってペニスを

溶かされてしまう。それに、クレアやハルにも申し訳が立たない。二人の為に絶対能耐なければならなかった。

下腹部に力を込め、わき上がってくる射精感を抑え込む。

(感じない。この程度我慢できる。我慢できるできるできるっ！)

心の中で何度も自分自身に言い聞かせた。

「……はあつはあつはあつ……な、なかなか頑張るわね。でも……こ、これならどうかしら？ これでもまだ耐えられる？」

言葉と共にライムは動きを変化させる。

「くっ、こ、これって……くあつ、んっ……くああああ……」

ただペニスを抜くだけではない。下半身そのものを、ゼリー状の肉体を使って擦り上げてきた。

ぐっちゅ、ちゅぶっ……ぬちゅぶるうう……。

「ふっく……んっんっんっ……はああああ……。ど、どう？ いいでしょ？ あたしの身体……はああはああ……あんたみたいな変態には、ちよつとし、刺激が強すぎるんじゃない？ こ、これでもまだ我慢できるの？」

ローションに塗れているかのように、スライムの肉体はヌルヌルしている。滑る生温かいゼリーで下半身全体を抜き上げられると、それだけで身体中から力が抜けた。そこに追

い打ちをかけるように、体内に吸盤でもついているのではないかと錯覚するほどの勢いで、じゅずるるると肌を吸引までしてきた。

(これ……か、身体の中身を吸われていくみたいだ……)

クレア達とのセックスでは感じたこともないような性感が身を襲う。肌を通じて内臓を吸い立てられているかのような気がする。決して苦しくはない。伝わってくるのは、明らかに快楽を伴った感覚だった。

(そういえば……ま、前に凶鑑で読んだことがある。スライムは互いの身体を溶けあわせながら交尾するんだって……)

つまりこれはライムとセックスしているということなのだろうか？

いつも小生意気な態度で自分を馬鹿にしてきたライムと交尾している——そう考えると、より興奮が高まっていくのを感じ、自然と肉棒がより大きくなった。

(つて、何考えてるんだ。変なことを考えるな……射精ちやう。射精ちやうから……エツチなことを考えちや駄目だあ)

必死に自制しようとする。その必至さの為——、

「あつく、んんん。お、大きくなってきたわ。ふふ、や、やつぱり感じてるんじゃない。変態、変態変態！ あつ、んんん。くつ、あつあつ……はふう……」

こちらを罵るライムの言葉の中に、甘い響きが含まれ始めていることに気付くことがで

きなかつた。

「どう？ あ、あたしの中——す、すぐく気持ちいいでしょ？ ほら、もう射精ちやいそうなんでしょ？ いいわよ……んんん。だ、射精しても……はあつはあつ……ち、ちんぽを溶かされてもよかつたらだけどね。ほら、ふくつ……ほらほらほらあつ！」

にゅじゅつ！ じゅつず、じゅずつじゅずつじゅずつじゅずつじゅずつじゅずつじゅずつじゅずつじゅずつ！

脚の爪先から腰まで——スライムの肉体が何度も何度も繰り返して抜いてくる。全身がペニスにでもされてしまったかのような錯覚さえ覚える事態だった。

チュウチュウと乳首が吸われる。にゅじゅつにゅじゅるるつと肛門にまで吸引が行われた。内臓を吸い出されるような刺激すら、快楽となつて身を襲う。

「そ、そんなとこ……き、汚いよ」

「べべ……別にあんたの身体に汚いところなんて——あ、ちがつ！ あ、あんたを懲らしめる為なら、これくらいな……なんてことないのよ！」

収縮する肉体が脚を、腰を、肉棒を蕩かせていく。激しく締めつけられながら擦り上げられるたび、肉棒は脈打ちながら龟头を膨れあがらせていった。

ライムの肉体は蠢けば蠢くほど、熱気を増していく。青い身体はフリックを扱けば扱くほど、赤く染まっていた。

「ど、どう？ これでも、これでもまだが……我慢できるの？ んっ、ふんっ……はふう

……。た、耐えられるの？」

「もちろんだよ。僕にはクレアとハ、ハルがいるんだ……。だから、これくらい耐えてみせるよ……」

「……。こ、こういう時に他の牝の名前を出すんじゃないわよっ！ この馬鹿っ！ でもまあいいわ。そこまで言うなら……。んふっ、んふーんふーんふー……。必ず射精させてやるんだから！ ほ、ほら、これで……。あっ、んっく……。こっこれで、ど、どう!!」

ムカツと少し怒ったような表情を浮かべると、上半身をこちらへと近づけてきた。乳房を隠していた手を広げると、グニュリツと抱き締めてくる。

「くっ、ふああああ」

クレアやハルの肌とは違い、文字通りこちらの身体にニチャアツと吸いつくような感触が伝わってくる。

「ふふ、どう？ 気持ちいいでしょ？ でもね、これだけで終わりじゃないんだから」
にゅじゅっ、ぐじゅるっ、じゅにゅううっ！

顔だけを残し、スライムは肉体を溶けるように崩したかと思うと、下半身同様こちらの上半身をも呑み込んできた。

(くああっ！ こ、これ、す、すごすぎる。僕が、僕の身体が……。ら、ライムと、ライムと一つになっていくうっ!!)

全身を膣中に取り込まれているかのような感覚だった。意識が根こそぎ持っていかれそうなほどに心地いい。制服はあつさり溶かされ、全裸を晒すこととなってしまった。

「ど、どう？ き……んんん……。気持ちいいでしょ。はあつはあつ……すぐにでも、射精ちやいそうなんじゃない？ これでもまだ耐えられるかしら？」

「当たり前だよ。こんな……これくらいで、ぼ、僕はだ、射精したりしない！」

直接肌を吸引され、明らかかな快楽を覚えてしまう。本当は少しでも油断すれば射精してしまいそうだった。

でも認めるわけにはいかない。快楽を認めれば、多分その瞬間自分は射精してしまうだろうから……。

「ふうん、この期ごに及んで強がりと言えるなんてなかなかやるじゃない。けど……これでも強がれる？」

だが、言葉での悲鳴など何の意味も持たない。それどころかよりライムに激しい行動を取らせてしまう結果しか生まなかった。

にゅじゅつ、ぐじゅるつ、ずつちゅ。ぬちゅつぬちゅつぬちゅつぬちゅう……。

スライム少女は全身を使って、フリックの肉体そのものを扱き上げてくる。

「うあああ、そ、それっ、それ駄目だあつ！」

途端にこれまで以上の性感が全身を襲う。

「い、いいでしょ？ んあつ、あつふ……んふーんふー……ビクビクッて、わ、私の中であんたのちんぽが震えてるわ。先っぽなんか、滅茶苦茶お、大きく——はふつ、あつ、んんんん……お、大きく、な、なってるじゃない。射精したくて射精したくて堪らないって感じよ。ほつら、んっんっ、む、無駄な抵抗なんかやめて、素直にか、快楽を……あつふ、み、認めなさいよ」

実際耐えがたいほどに心地いい。自分の身体とライムの身体が、文字通り溶けあい、混ざりあつていくような気さえする。このまま性感に流されてしまいたい——本能が激しく訴えてきた。

「だけど……だけど駄目だ。射精さない。射精せないっ！ 射精しちゃいけない!!」
わざわざ口に出すことで、射精感を抑え込もうとする。

「どうして、な、なんでそ、そこまで耐えるのよ？ はふつ……ふつく、ふうっふうっ……そんなにあ、あの二人が大事なの？」

するとライムは顔を赤く染めながら、ムツとしたような、それでいてどこか悲しげな表情を浮かべてフリックを見つめてきた。

「それとも……そんなに耐えなくちゃいけないほど、あたしなんかの膣中には射精したくないの？」

向けられる赤い瞳が潤む。今にも泣きだしそうな表情に見えた。

「そんなことない……だ、射精したいよ。射精せるならライムの膣中に射精したい……。でも、それをすれば二人を裏切ることになるし、ライムにも悪いから……。だから……。だから射精しちゃいけないんだ」

「あ、あたしにも悪いってどういうことよ……」

「だって、だってそうだろ？　こういうのは好きな人とやるべきことだ。こんな形で……。嫌いな相手のを身体の中で受け止めるなんてしちゃいけないよ」

クレアとハルと出会ったことで、好きな相手と繋がりがあうことの幸福を知った。だからこそ、ライムにもそれを知って欲しいと心の底から思う。

「——なっ！　何ふざけたこと言ってるのよ!!」

「ふざけてなんかない。ライムだって……。僕のなんか本当は膣中で射精して欲しくなんかないだろ？」

だからやめるんだ——と、視線で訴えた。

するとライムは一瞬瞳を見開き、困惑したような表情を浮かべると、一度俯き——、

「……あんな……。なら……。別にいいわよ……」

小さく呟いた。

「え？」

彼女が何を言ったのか聞き取れず、思わず聞き返す。

瞬間——。

「んじゅっ——ふっむ、むふうううっ」

唐突にライムが口づけてきた。しかもただ触れるだけのキスではない。舌を伸ばし、こちらの口腔に挿し込んでくる。

ぐちゅっ……。ちゅぶるっ、にゅちゅっ……。くじゆるう……。

「ふっむ……。むふっ……。はむっ……。むっちゅ……。もっ、ふもっ……。むふううう……」

執拗なまでに貪られる口腔。舌もゼリー状であり、口腔粘膜に甘ったるい味が染み込んでくる。脳髓まで蕩かされてしまうかのような性感を覚えた。

「ふっぐ、だ、らっめ、らめだよライム。んっんっんん。こ、このキス——気持ちよすぎる。むじゅっ……。はむう……。こっれ、射精ちゃう。そんなにキスされたら射精ちゃうからあっ！」

口腔を貪られるだけで、抑えきれないほどに射精衝動が増幅する。必死にスライム少女の行動を止めようと藻掻き、訴えたが——、

「うるしゃい……。じゅちゅるっ……。にゅちゅっ……。れろれろっれろお……。でひゃいしよ
うなら、だひえぱいりやにゃい。ほりゃ……。んっちゅ、ちゅぶっ……。にゅちゅる……。
らひなしゃいよ。ほりゃ……。んっく、んあっ、あっあっあんんん」

聞き入れてはもらえない。

赤く染まった肉体に、白い液体が広がっていく。同時にライムはビクッビクッと激しく肉体を痙攣させた。

「あっ……ふああああ……ふうふう……う、うふふ……ふふふ……」

すべてのザーメンを受け取り、うっとりとした吐息を漏らすと、しばらくはあはあと呼吸を整えた後、スライム少女は普段の彼女からは想像もできないほど妖艶な笑みを浮かべて笑った。

「だ、射精したわね。あたしの中に……このド変態。嘘つき」

その上で辛辣な言葉を向けてくる。

「そ、そんなこと言われても……」

射精の余韻をまだ残しながら、弁明しようと口を開く。

「言い訳は無用よ。口でなんと言ったところで、実際あんたは……はあはあ……こうやって射精しちゃったんだから……」

「それじゃあ……もしかして、本気で溶かすの？」

血の気が引いていく。

「流石にそれは可哀想だからしないわよ。ただ……ふうふう……。あんたを放置しておく
とあたしの同胞である亜人の女の子達が危ないわ。だから……」

「だ、だから？」

「いったい何をするつもりなのだろうか？　ゴクリッと息を呑みながら首を傾げる。

「あんたの精液——あたしが、一滴残らず搾り取ってあげるわ」

「それって……セックス——こ、交尾を続けるってこと？」

「そうよ。でも、勘違いするんじゃないわよ。別にあんたとしたいわけじゃないんだからね。本当に、他の女の子達の為の……その、お、オシオキみたいなものなんだからね！」

「そう言うと共に——、

「んちゅっ——むじゅっ……ふじゅるう」

ちゅぶっ、ぐちゅっ、にゅちゅっ……ちゅずっ、ちゅっちゅっちゅるるう……。

再びライムは口づけしてきた。舌で舌を搦め捕り、粘液と粘液を混ぜあわせてくる。すぐさま思考が熱に浮かされたようになり、射精を終えたばかりのペニスが再び硬く、熱く勃起を始めた。

「そうして、身体と身体、細胞の一片一片までが一つに溶けていくような濃厚な交尾が始まる。」

ちゅぐっ、ずじゅるっ！　ずっちゅずっちゅずっちゅずっちゅ！

「どう？　んっんっんっんっ、き、気持ちいいでしょ？　あたしの身体……あつふ、んんんん。す、すぐいいでしょ？　ほら、もう、もう射精そうじゃない？」

「蠢きに合わせて肉体の締めつけがきつくなっていく。」



「き、きもひいい。んっんっんっ……それ、き、きもひいいよ。くっ、うむっ……むふう」
官能の疼きが全身に広がっていく。増幅していく射精衝動。

もっと、もっともっともっと気持ちよくなりたい——そう本能が訴えるままに、より唇を貪りながら、フリック自身も腰を振り、蛇の尻尾に肉棒を押しつけた。

「むっふ——あっ、んじゅっ……ふっむ……あ……。んんん……。くふっ、ん……硬いの
が押しつけられるの、き、気持ちいい……。んっちゅ、れろっ、れちゅっ、ふじゅるう
っ……。れろっれろっれろお……」

ぬじゅっぬじゅっぬじゅっぬじゅっ！

愉悦に溺れるように、口腔を蹂躪しながら二人で腰を振りあう。

「す、すごい……。んっんっ……。お、大きい。これ、大きくなってる……。あ……。それに、か、
硬い……。硬くて熱い……。んっちゅ、はむうう。ピクピクっ……。動いてる。はあっは
あっはあっ……。これ、私の……。私の身体も熱くなつて……。ん……。る……」

グラインドに合わせてペニスは肥大化していく。この肉槍の膨張に比例するように、ミ
アが漏らす嬌声が甲高いものに変わっていった。ヌルヌルとした体液が、鱗の間から溢れ
出してくる。

ねっとりと糸を引くほどに汁は濃厚だった。甘く脳髓を刺激するような発情臭も同時に
溢れ出す。

ぐちゅっ……。にゅちゅるっ。ちゅぐつちゅぐつちゅぐつちゅぐう……。

肉汁がペニスに絡みつき、潤滑液となる。扱きの速度が増していく。一扱きごとに、肉棒が爆発しそうなほどの性感が膨れあがった。

「だ、駄目だ。もう——もう射精ちやうよ」

鈴口を焦がすような官能の疼きを覚える。わき上がる性感を抑えることなどできそうになかった。

「ふうっふうっふうっ……か、構わない。射精して……。たくさん、たくさん射精して。私も……。私ももう……。くっふ……。ん……。あっ……。っ……。っ……」

どじゅるっ、にゅちゅちゅにゅちゅちゅにゅちゅちゅにゅちゅちゅ……。

こちらの背に手を回し、よりきつく抱き締めてくる。押しつけられる小さな胸の感触や、はあはあと耳に届く熱い吐息の響きが、膨張する本能を後押しした。

最早止まることなどできない。

「射精るよっ！ 気持ちいい。いくよっ！」

瞬間、目の前がチカチカッと明滅した。ピクンッと肉槍が震え——、ぶびゅぱっ！ どっびゅっ！ びゅっびゅっびゅっびゅっびゅぶるるるるっ！

熱液を撃ち放つ。

「あっ、あつっ——んっ、んふううううう！ 射精てる。熱いのが射精て——私、わたっ

し……だつめ、もう……あつ……くつ……んつんつ……」

吐き出された白濁液が蛇肌に染み込んでいく。途端にミアはビクンツと背中を弓形に反らしながら一瞬硬直すると、次の刹那には壊れた玩具のように激しく痙攣を始めた。

「き、気持ちいい……。これ……気持ちいい……はふう……」

トロンツと瞳を蕩かせながら、だらしなく口を開き、惚けたような絶頂顔を晒す。これまで見てきた無表情な顔とは違う。肉欲に溺れる牝の顔だった。

（すごくエッチな顔だ。こんな顔見せられたら……また……またあ……）

射精を終えたばかりだというのに、またも肉棒は硬く猛り始める。

「……硬い……はあはあ……射精したばかりなのに、また硬く……熱くなっている……」
もちろん再勃起はミアにも気付かれてしまった。

「ご、ごめんっ！」

反射的に謝るが、ラミア少女は「別に構わない」と言っつて首を横に振る。

「まだ治療は終わってない。本番はここから……」

開いた口端からだらりつと唾液を垂れ流して、ニユルルツと下半身を蠢かせつつ、ラミアは上半身を起こす。拘束されたまま、フリックも身を起こすことになった。ちょうど向きあうような体勢となる。

「今度はここ……ここに挿入れて……。私と交尾……して欲しい」

僅かに身体を離すと、人間と蛇の身体の境目に手を伸ばす。そこに指を添え——クパアツと左右に広げた。

ミアの花弁が剥き出しになる。肉汁に塗れた花弁。膣中からはドロリツと濃厚な牝汁がご馳走を前にした子供が垂れ流す涎のように溢れ出してきた。

サーモンピンク色のとても美しい花弁に視線を奪われる。淫靡なミアの牝牝の部分を目にして、ゴクリツとフリックは息を呑んだ。

すぐにでも肉棒を挿入したいという衝動に襲われる。

「い、いいの？」

「構わない。挿入れて……」

その言葉を証明するように、肉穴が口を開けた。

近づいてくるミア——向かいあったまま、肉先にグチュリツと膣口を押しつけてくる。

「んっ……はふうっ！」

触れただけで、ピクンツと少女の肢体が震えた。肉襞の一枚一枚が亀頭に吸いつくように絡みついてくる。

ずじゅっ、じゅぶっ……じゅぶぶぶ……。

「あっふ、んっ……。あっあっ、は、挿入ってくる……。くっ、膣中に……熱いのが広がる……ふうっふうっふうっ……」

媚肉の海に肉槍が沈んでいく。獣肉を左右に押し開きながら、ズブズブズブズブと蜜壺を蹂躪していった。

「ああ……私の膣中が広げられていく。熱いので、み、みた——満たされて、い、いく。あ……。いい。私の穴を……。あなたのでいっぱいになっていくの……。す、すごくいい♥」

「僕も……僕もすごくき、気持ちいいよ。ミアさんの……」

「さ、さんはいらぬ。お願い。よ、呼び捨てにして……」

「分かった。ミアの……ミアのおま○こで締めつけられるの、すぐに射精ちやいそうなくらい、気持ちいいよ！」

ズブズブと奥に挿入れれば挿入れるほどきつくなる締めつけによつて、屹立はより膨張していく。先程射精したばかりだというのに、狂おしいまでの射精衝動が下腹部から肉先に向かつて溢れ出してきた。

「だ、射精して……。構わない。私の……私の膣中に射精して……。うつつ、はううう。欲しい。あなたの子種が欲しい。射精して。射精して」

鈴の音のように美しい声が射精を求めてくる。ただ耳元で囁きかけられているだけだというのに、脳髓——心の中にまで染み込んでくるような気がした。

「ミアっ！ ミアああっ！」

ブヂッ！ ブヂブヂブヂイッ！！

抑えがたいほどに欲望が高まる。ミアのすべてを自分のものにした——生まれ出る欲求のままに、自ら腰を突き出す。ブジュヅウウツと膣奥にまで肉先が到達した。ズンツと亀頭がミアの子宮口を叩く。

「ふひっ！ お、おくっ！ あっあっ……わ、わたっしの、お、奥までき、きた——あっあっあっ、初めて……こ、交尾するの初めてなのに……気持ちいい。あなたの……フリックのおちんちん……気持ちいい♥ これ、また、私——また……」

ぎゅじゅっ、ぎゅじゅるるるうっ！

ペニスが押し潰されるのではないかと思うほどに蜜壺が収縮する。それに合わせるように、フリックの肉体に絡みつく尻尾の締めつけもきついものになった。息がつまり、身体が押し潰されるのではないかと思うほどの締めつけ。

だというのにまるで苦しさは感じない。それどころか、全身を蜜壺で締め上げられているのではないかと錯覚するほどの性感を覚えた。

「き、気持ちよすぎる！ こんなもの、こんなもの、我慢——我慢できない!! うあっ、くあああああっ！」

びゅぶぶっ！ どびゅぶっ！ びゅぶばああああっ!!

射精衝動を抑え込むことができない。ドクンツドクンツと肉茎を痙攣させながら、膣中に濃厚牡汁を解き放つ。

「ふひっ！ あ、で、射精てる……んっ……はあっ……腔中で、私の腔中で……ふ、フリックのおちんちんが震えて、精液、精液出して……る……。熱い。こつれ、熱い……。なっかが、私のおま〇こが——満たされてく。あっあっ……んっ……っ……っ……」

溢れ出した熱液が一瞬で蜜壺を満たしていく。激しすぎる射精。こちらの身体をこれまで以上に締めつけながら、ミアも腔中射精なかだしされつつ達した。

「ああ……はあーはあーはあー。す、すごひ……い、いっばい。私のおま〇こ……い、いっばひになつてる……あ……はあああ……」

先程達した時以上に表情を蕩かせる。

「ごめんミアッ！ 我慢できないっ!!」

牡を求める牝の顔——淫靡すぎる表情に、肉棒は萎なえるどころかより硬くたぎっていく。熱液を吐き出す前以上に、肉槍は熱く、硬く屹立した。

もつと、もつともつともつともつとミアと繋がりあいたい。ミアの身体を貪りた
い——本能が膨れあがる。

(気持ちよくなりたい。それに……気持ちよくさせてあげたい)

主によって虐待されているミアを、今だけでいいから慰めてやりたいという気持ちも、同時に膨れあがってきた。

「いくよっ！ いくよミアっ!!」

にゅじゅつ！ ぐっじゅつ！ じゅつぶじゅつぶじゅつぶじゅつぶじゅつぶ！

肉体を縛り上げられたまま、腰だけを必死に振る。それほど大きな動きはできないけれど、ひたすら蜜壺を掻き回した。

「あつく……ふひっ！ 動いてる。フリックのが、わ、私の腔中で——あっあっあっ……もっと……もっと奥まで……私を犯し……て……」

性欲に塗れた歓喜の表情をミアは浮かべると、尻尾でよりきつくこちらの肉体を締めつけながら、ピストンに合わせて腰を振り始める。

一突きごとに蜜壺は締めつけを増していく。蛇肌からは後から後から際限なく、肉汁が溢れ出してきた。汁と汁が混ざりあう。

「フリック！ フリックう♥んっふ、むっ、ふむううう」

ちゅぶつ……にゅじゅるっ……。ぐちゅっ、ちゅっちゅっちゅじゅるるるう。

ただ腰を打ちつけあうだけではなく、再び口づけをしてくる。繋がりがあう唇と唇。絡みあう舌と舌——秘部だけではない。全身が溶けあい、ミアと一つになっていくような気さえした。

「ミアっ！ ミアあああっ！」

抑えきれない。

口づけしつっ垂人少女の名を呼びながら、より深く、より奥まで肉棒を突き込んでいく。

「むっふ……あ……はふっはふっ……んっんっんん」

ドジュツドジュツと突き込むたび、ミアはキスを続けながら肢体を痙攣させる。窄まる蜜壺。これまで以上に肉襞の一枚一枚がペニスに食いついてきた。

自分自身のすべてが吸い上げられてしまうのではないかと思うほどの締めつけ。白濁液をすべて搾り取られそうなくらいの肉壺の刺激に、射精衝動が増幅していく。ペニスはより熱く、硬くたぎっていった。

「おお……きくなつて……る……あっ……だ、して……。私に……あつあ……フリックのを……たくさん射精して……」

蜜壺の収縮に合わせるように、ギュウツとミアの尻尾が万力まんりきのように身体を締め上げてくる。

じゅばんっじゅばんっじゅばんっじゅばんっ！

「射精して——たくさん。たくさん射精して……あ……ふっ……ふっふっふっ……」

まるで女を犯す男のような激しさで腰をくねらせてくる。文字通り発情した獣の如きグラインドだった。

「くっ！ 射精すっ！ 射精すよっ！！ ミアの膣中に射精す！ たくさん、たくさん流し込むからねっ！！」

強い想いに応えるように、亀頭をパンパンに膨れあがらせながら腰を振る。

性欲は収まらない。それどころか、より強くなっていく。射精を終えた肉棒が更に、硬く大きく、たぎっていった。

「欲しい。私も……はふっ——もっと、もっと欲しい。もっと射精して欲しい。もっと絶頂かせて……」

ミアも同様に、達してなお性欲を募らせ、求めてくる。絶対に離さない。もっときつく、強く抱い欲しい——そう訴えてくるように、尻尾の締めつけがきつくなっていく。

癒やしの力を持つラミア。その力は性欲さえも容易に回復させる。ラミアの交尾は一度に数時間。それを証明するかのようには、

「ミアっ！ ミアあああああっ」

「あ……あっあっ……。射精てる。また、また……♥　っ……っ……っ……♥」

——数時間後。

「すご……い……あ……はあ……。こんな……に……こんなに射精てる……。私のお腹……フリックで……いっぱいになってる……」

散々白濁液を流し込まれたミアの下腹部は、妊娠でもしているのではないかと思えるほどに膨れあがっていた。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元的なヒロインは、美満の方に入ってください。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。